

# 私の一冊

歯科衛生学科 鈴木温子 先生

レオン・ドゥニ著 『ジャンヌ・ダルク 失われた真実』

小鹿図書館：289.3/J 31（ハート出版）

「私の一冊」を選定するというのもなかなか厄介なものである。思い起こせば幼い頃から祖父がよく手にしていた『中央公論』や『文芸春秋』をわくわくしながら読みあさったり、隣の本屋さんで実によく立ち読みをしたりしていたものだ。当時は『世界名作全集』や『日本文学全集』、その他歴史書や昆虫図鑑などがずらりと並んでいるお宅があまり無かったせいか、一様に友人達がわが家の本棚を見て驚いていたのを覚えている。私を別世界にいざなってくれる感動ものにも数限りなくめぐり会えたし、傷ついた心をほっこり包み込んでくれる本にもたくさん出会えた。心に染み入るような音楽が世界中に散りばめられているように、宝物にしたいくらい素敵なお本にもこれからまだまだきっと出会えるだろうと思うだけで胸が熱くなる。たかだか本一冊を選ぶことがしたがって私にはなかなか難しい。

2005 年の春、私は自然の美しさを讃えて今では「フランスの庭園」とも呼ばれているロワール川中流にあるオルレアンの町にひとり立つことができた。まだ冬の終わりを感じさせる街中を「オルレアンの少女」ジャンヌ・ダルクの面影を求めて歩き回った。ロワール河畔から古城眺めながら、遙か 600 年もの昔、このあたりを白馬に乗って颯爽と駆け巡ったジャンヌ・ダルクに思いを馳せていると、何故か 19 歳の少女ジャンヌがとても愛おしく思えてきた。

14 世紀から 15 世紀にかけて起きた百年戦争で突如として現れたヒロイン、ジャンヌ・ダルクについて恐らく知らない者はいないだろう。フランスのドンレミという小さな村に住む羊飼いの娘ジャンヌは、17 歳になったある時、「立って祖国を救え」という神の声(大天使ミカエルの指示ともいわれている)を聞いたとして、フランスを救うため剣を手に故郷を旅立った。男装したジャンヌは神がかり的な勢いで快進撃を続ける。ジャンヌが敵軍に捕らえられたのは 1430 年 5 月 23 日コンビエーニエであった。彼女を捕らえたのはブルゴーニュ軍であったが、ブルゴーニュ軍は彼女を1万フランで敵国イギリス軍に売り渡してしまう。フランスにとって英雄であっても、イギリスにとってはジャンヌ・ダルクは憎き相手である。結局彼女は異端者として宗教裁判にかけられ、14 回にものぼる異端審問の後に、「男装したこと」、「教会を経由せず直接神に応答しうると信じたこと」という理由で有罪となり死刑を宣告される。しかし、その直後にジャンヌが過ちを認めたためいったんは終身刑に減刑されるが、牢獄に収容された後にジャンヌがふた

たび過ちを撤回して男装したため、再度審問に付されて死刑が確定する。そして 1431 年 5 月 30 日、ルーアンのヴィユ・マルシェ広場の火刑台上にジャンヌ・ダルクは 19 歳の生涯を終える。歴史の舞台に現れてからわずか 2 年あまりのことである。

もしもジャンヌ・ダルクがいなかったらフランスの歴史はどうなっていたのであろうか。ジャンヌ・ダルクが犠牲になることによってフランスは一つの国家となり、また、ジャンヌの spirituality がヨーロッパの歴史を変えたと言っても過言ではない。そしてこのような例は歴史上他には見あたらないのである。結局ジャンヌは異端者として処刑されたためその後もずっと異端者のままであったが、ローマ・カトリック教会はあらためて復権裁判を開始し、死後 25 年後の 1456 年 7 月 7 日、ジャンヌのカトリック信徒としての無罪は証明され、その名誉と権利はここに完全に回復されるのである。

オルレアンの少女ジャンヌ・ダルクが国民的な人気を獲得するのは、死後 372 年後の 1803 年、ナポレオン・ボナパルトが国家の指導者として初めてジャンヌを賛美したことがきっかけと言われている。さらに 1919 年、カトリック教会がジャンヌ・ダルクに聖女の称号を与えてからは、ゆかりの街々の広場に必ず建てられてきた戦士姿の乙女像に加え、フランスの大きな教会や女子修道院の庭にも必ずといってよいほど聖女ジャンヌ・ダルクの彫像が置かれるようになった。ジャンヌをテーマとする著作の数も今では万を超えるほどになっているという。フランスに行って初めて、フランス人のジャンヌへの信仰と思慕の深さが私の想像を遙かに超えていることを思い知らされた。“えらばれた女性”の栄光は彼女自身が予測していた通り長くは続かず、結局歴史は非情にもこの少女を許さなかつたのであるが、今もなおフランスのみならず世界の人々の心に生き続ける聖女ジャンヌ・ダルクの生涯に、一度じっくり触れてみるのもいいかもしれない。

最後に、ジャンヌ・ダルクほど有名で、またジャンヌ・ダルクほど誤解された人物もいないと思うのであるが、靈實在主義者でもある著者レオン・ドゥニ(1846~1926)は、この本を世に出す前に胸の内をこう明かしている。「ジャンヌ・ダルクの宗教的信条において最も重要な位置を占めていたのは、目に見えない世界、聖なる世界との交流であった。超自然的、奇跡的な力ではなく、目に見えない力が実は存在している、ということなのである。その力を認めない限り、ジャンヌを真に理解することはできないだろう。ジャンヌ・ダルクはキリスト以来、地上に現れた人間のうちで最も高い靈的資質を備えた人間である。思わず彼女の前にひざまずきたくなるのは私だけではあるまい。私はこのジャンヌの靈に照らされ、導かれてこの本を書いてきた。」と。

今こうしてジャンヌ・ダルクの伝記を書くのに最もふさわしい人物が現れ、靈界にいるジャンヌ自身から直接交信を得て、まさしく眞実に基づく歴史が彼によって初めて語られたのかもしれない。